

2023 年度近畿学校保健学会奨励賞 抄録

保健体育科教員をめざす学生におけるメンタルヘルスとその関連要因

浅沼 徹
京都教育大学

キーワード：教員養成、保健体育科教員、メンタルヘルス、教員資質能力、ストレス対処力

【目的】

大学生において、メンタルヘルスの保持増進は、日々の満足な学習やキャリア形成の上で重要である。

他方で、文部科学省（2022）によれば、令和3年度の全国の公立学校における教育職員の精神疾患による病気休職者数は5,897人であった。これは全公立学校教育職員の0.64%を占め、人数は過去最多であったと報告されている。

上家ら(2013)は、学校教育職員の就労システムについて、「教員は初任者の時点で学級を担任することも少なくなく、就任当時から指導者の立場を余儀なくされる」と述べており、すなわち教員養成課程段階での教員としての資質能力の向上の必要性を示している。

筆者らはこれまで、保健体育科の教員養成課程学生を対象として、教員資質能力の向上やソーシャルサポートの豊富さが、ストレス対処力の高さに関連があることを報告してきた（浅沼ら、2017・2019）。本研究では、保健体育科教員をめざす学生を対象に、メンタルヘルスの関連要因を検討することにした。本研究により、教員養成系大学における、メンタルヘルスの保持増進を踏まえたキャリア支援の実践に向けた示唆を得ることができるものと期待される。

【方法】

2018年7月に、関東圏内の私立A大学体育学部における教職課程1～3年生の計465名を対象に、記名自記式質問紙を用いた集合調査を実施した。

調査項目は、次のとおりである。メンタルヘルスに関する項目として、1) K6 質問票日本語版、2) 教職に対する不安度、3) 教職に対する自信度を尋ねた。また、関連要因として、4) 教員資質能力（6因子：①仕事に対する自信、②教員としての責任感、③教育問題に対する関心、④仕事のやりがい、⑤情報処理能力、⑥情報管理能力）、5) ソーシャルサポート（3因子：①評価的サポート、②情動的・道具的サポート、③情緒的・所属的サポート）、6) ストレス対処力を設定した。さらに、7) 基本属性（性別、学年）を尋ねた。

有効回答者367名（78.9%）を分析対象とした。分析にはIBM SPSS Statistics ver.26を用い、ロジスティック回帰分析および重回帰分析を実施した。

【結果】

まずK6得点について、先行研究を参考に、カットオフポイントを9点（気分障害・不安障害相当の心理的苦痛：8点以下=なし、9点以上=あり）としてロジスティック回帰分析を行った。その結果、「仕事に対する自信」（OR=.91, $p=.001$ ）、「評価的サポート」（OR=.94, $p=.012$ ）、「ストレス対処力」（OR=.90, $p=.025$ ）の3項目が単独で有意な関連を認めた。したがって、これらの3項目について得点が低いほど、気分障害・不安障害相当の心理的苦痛が「あり」となるリスクが高いことが示された。

次に、教職に対する不安度について重回帰分析を実施したところ、「仕事に対する自信」（ $\beta=-.41, p<.001$ ）の1項目のみが有意な負の関連を認めた。

さらに、教職に対する自信度について重回帰分析を行ったところ、「仕事に対する自信」（ $\beta=.23, p<.001$ ）、「教育問題に対する関心」（ $\beta=.16, p=.001$ ）、「仕事のやりがい」（ $\beta=.18, p<.001$ ）、「評価的サポート」（ $\beta=.11, p=.023$ ）、「学年（1・2年生=0、3年生=1）」（ $\beta=-.18, p<.001$ ）の5項目が、それぞれ単独で有意な関連を認めた。

【考察】

メンタルヘルスに関する項目の全てに関連していた要因は「仕事に対する自信」であり、これを高めるための支援が最も重要であることが示された。また、「評価的サポート」もK6、教職に対する自信度と関連を示したことから、学生の努力や心がけ、成果を適切に評価し、フィードバックを行うことがメンタルヘルスの保持増進の上で有効であると示唆された。

他方で、1・2年生に比べて3年生は教職に対する自信度が低いことが示されたことから、3年生に対しての重点的な支援も必要であることが考えられた。

【結論】

保健体育科教員をめざす学生を対象に、メンタルヘルスの関連要因を検討した。その結果、共通する重要な要因として、仕事に対する自信の強さと評価的サポートの多さが認められた。また、高学年者の教職に対する自信度を高める支援の必要性が示唆された。